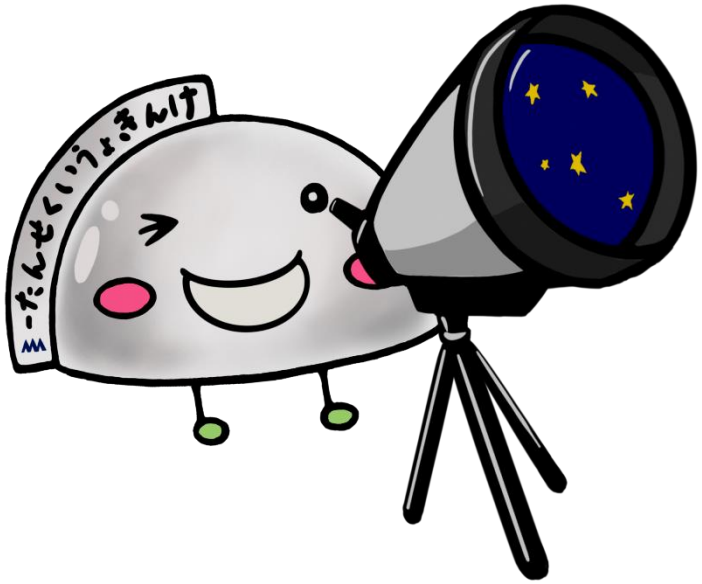
山形県教育センター　令和５年度調査研究

学び続ける教師を支える研修体系設計に係る研究
― すべての教職員に充実した学びの場を提供するために ―



研究メンバー

所属課	氏名
研修課	阿部瑞枝、髙橋千雲、岸淳一郎、 丸山あき子、阿部淳一
研究・情報課	小池正春、澁間安、田中千景、芳賀崇
特別支援教育課	古澤智、鑓水佐知子
教育相談課	岩井暁子

内容

１．研究の経過

２．第１年次（令和５年度）の研究報告

〇「横断・縦断・連携」の視点から

（１）「学校マネジメント講座」の振り返り

（２）新庄市立明倫学園の視察

〇「ニーズを反映した研修づくり」の視点から

（３）研修形態別の満足度調査結果

（４）教職員が困っている・悩んでいる項目の調査結果

３．次年度以降の展望

１．研究の経過（１）

「令和の日本型学校教育」を実現するためには、子供たちの学びの転換とともに、教師自身の学び（研修観）の転換が求められている。

➡ 「新たな教師の学びの姿」の構築へ

◇ねらい

大テーマである「ウェルビーイングの実現に向かう学校を支援する」ことを目的に、質の高い研修体系をつくる。

◇研究期間

令和５年度から３年間

◇趣旨

・すべての教職員が負担なく自発的に研修に参加できる、「学び続ける教師」を支える環境の充実を目指す。
・従来の研修講座の内容・実施形態等の改善点を研究し、充実した学びの場を提供する。

１．研究の経過（２）

◇３年間のおおまかな流れ

現行の研修等を振り返る → ニーズの調査、改善点の検討 → 調査結果の考察、研修講座への反映

◇第１年次（令和５年度）の進め方

以下の２つの視点で研究を進める。

①「横断・縦断・連携」
②「ニーズを反映した研修づくり」

◇第１年次（令和５年度）の活動内容

（１）「学校マネジメント講座」の振り返り
（２）義務教育学校の視察
（３）研修形態別（集合・オンライン・オンデマンド）の満足度調査
（４）教職員が困っていること・悩んでいることの調査
（５）教職員が求めている研修講座の調査準備

（１）～（２）：「横断・縦断・連携」
（３）～（５）：「ニーズを反映した研修づくり」

２．第１年次（令和５年度）の研究報告

○「横断・縦断・連携」の視点から

（１）「学校マネジメント講座」の振り返り

「学校マネジメント講座」とは・・・
　令和５年度から新たに始まった県教育センターと山形大学が“連携”して進める教員研修。年間にわたる省察的実践を通して、全校的な学び合い文化を醸成しながら、学校マネジメントに必要な資質・能力の向上を図ることを目的としている。

年間の流れ（県教育センター専門研修ポスターより抜粋）

Ａ（基礎）、Ｂ（選択）の講座の主な流れ

	研修内容	方法
午前	・オリエンテーション Ａ「学校組織マネジメントの考え方と進め方」 Ｂ「〇〇講座」	講義・演習
午後	・実践プランテーマ別 グループ／個別カンファレンス ・振り返り	演習

・文献等を活用した理論の学習
・様々な実践例の紹介
・各校の「実践プラン」をどのように進めるか

・「実践プラン」の準備
（発意→構想・構築）
・専門家との関係構築（相談）
・テーマ別のディスカッション
（他校種とも情報交換）

Ｃ（省察）・・・各校の実践プランの進捗状況について相談
Ｄ（報告）・・・実践プランの全体発表、次年度への展望

年間に渡る各校の「実践プラン」の省察的実践とカンファレンスを通して、学校マネジメントに必要な資質・能力を育成していく。

参加者人数（人）

内　容		小学校	中学校	特別支援学校	高等学校	合計
年間（全４回）		8	4		8	20
B1のみ	地域連携	3	4		1	8
B2のみ	学校防災	2	2		1	5
B3のみ	校内研修	13	4		4	21
B4のみ	学校DX	6	4	1	6	17
延べ人数		32	18	1	20	71

Bだけの参加

カンファレンスの様子

講義・カンファレンスを聴講したセンターの研究メンバーの感想から

- 「問題解決型」の研修で、教師自身の学びの転換が図られる構成になっている。
- 他校種の教員や事務職員と交流することで、参加者の多くに新たな気づきがあった。
- 個別の課題、今目の前に直面している課題に対して、長期スパンで直接助言をいただける環境は、研修者をより主体的にするということを目の当たりにした。
- ICTも活用したアフターフォローを充実させることで、困ったときに、気軽に相談できる場所がある。「学びカフェ」の広がりが、場づくり、空間で先生方を支えている。

年間で参加した受講者の感想から

- 「まずはやってみる、そして省察する。次の段階にいく。」という学びが、今必要とされている主体的、対話的な学びなんだと実感として感じることができました。（小学校）
- 自分の考えが偏りそうになった時、違う角度から意見をいただけたことが良かった。（中学校）
- この一年の講座に参加して感じたことは、「思っていたら言ってみて、動いてしまえば何かが起こる」ということです。周囲は何かやっている人に興味を示すものと感じました。また、それに反応できる人は、前向きな人が多いことに気付きます。（高等学校）
- 最も心に残っていて今後も活かせそうな学びは、「学校の強みを生かして、新しい強みを生み出していくこと」、「個人の独自の視点と、組織の強みを生かして、実践を重ねていくこと」、「細く長く、無理なく取り組んでいくこと」、「トライアンドエラーを繰り返していく実践が必要であること」である。（高等学校）

（２）新庄市立明倫学園（義務教育学校）の視察

期日　令和５年１２月４日（月）

目的　義務教育学校の授業・学習面の小中連携を中心に調査し、メリットや効果等を明らかにして、教育環境の向上に資するための情報を収集する。

日程

時　間	内　容	備　考
9:30～10:15	研究授業１　参観	３年Ａ組【道徳】
10:40～11:30	研究授業２　参観	８年Ａ組【社会】
11:40～12:10	**乗り入れ授業**の参観・校内見学	６年美術、６年音楽、７年家庭
12:10～12:30	英語科の連携について説明	パフォーマンステスト
13:30～14:20	質疑（事前質問への回答）	校長先生、教頭先生より
14:30～15:45	事後研究　参観	小中混合のグループ協議

中学校籍の専門教科の教員が指導

回答を次ページへ

明倫学園のカリキュラム編成

１～４年（前期ブロック）	５～７年（中期ブロック）	８～９年（後期ブロック）
学級担任制	一部教科担任制、制服着用、児童生徒会に参加	完全教科担任制、教科教室制の推進

質問	回答
教科において、どのような連携をしているか。	・「授業研究」は合同で行い、小学校籍・中学校籍関係なくお互いの授業に助言し合っている。 ・小ー中の区切りをせず、日常的に連携を取る。 ・音楽、美術、家庭、理科では「乗り入れ授業」をしているが、他の教科に拡大するのは難しい。（１学年３クラスのため）
教科の連携には、どのようなメリットを感じているか。	・特に技能系の教科では、中学校籍の専門教科の先生が小学生に指導してくれることで質の高い授業を提供できている。 ・上級学年の内容に早い段階で触れられる。 ・小学校籍教員の空き時間が増える。
教科の連携には、どのような課題や困難を感じているか。	・現状では中学校籍の教員の負担が増えているが、校務の見直し等により対応している。 ・学校文化が違うので融合に時間がかかる。
義務教育学校以外で連携を取る場合、どのようなことをしてみたいか。	・小学校での「出前授業」ならばすぐにできる。児童生徒を移動させての活動は準備が必要。
授業・教科以外で連携している部分はあるか。	・学校行事はすべて合同で実施している。 →４年，７年，９年生のリーダー育成に力を入れる，下級生は上級生の姿を見て多くを学ぶ。 ・児童生徒の生活指導面では、中学校の「厳しさ」が良い刺激になっている。
授業の引き継ぎ、生徒指導面の引き継ぎはどのようにしているか。	・授業や学習面の引き継ぎは、職員室の「中期ブロック」の座席で頻繁に各自行っている。（特に「引き継ぎの時間」を設けてはいない）

視察参加者の感想より

☆「研究授業（３年道徳、８年社会）」を参観して

→非常に多くの先生方が参観していたが、どちらのクラスにも自由に意見を言える空気があった。日頃から多くの先生方が出入りして積極的に児童・生徒に関わっていることが推測できる。

☆「乗り入れ授業（６年美術、６年音楽、７年家庭）」を参観して

→小中の連携を至る所で感じ、小学校段階から中学校籍の専門教科の先生の授業を受けられるので、メリットが多いと思った。

☆事後研究会を参観して

→小中混合のグループを作って話し合うことで、お互いの刺激となり、確実に視野が広がっている。全職員が真剣に、そして楽しそうに話しており、同じ方向を向いているように見えたことが印象的であった。

☆校内を見学して

→５教科の専門教室があるメリットが大きいと思う。全ての部屋が広く、開放感がある。昇降口前の交流ホールの今後の活用方法が楽しみである。

☆その他（全体を通して）

→・想像していたよりもずっと小中の連携（融合）が進んでいた。

・児童生徒を縦割りに活動させることで、自立につながると強く感じた。

・児童生徒、教員共に新しいことにチャレンジできる環境があり、経験値が高まると感じた。

美術乗り入れ授業

外国語教室での授業

事後研究会の様子

○「ニーズを反映した研修づくり」の視点から

（３）研修形態別（集合・オンライン・オンデマンド）の満足度調査

「今回、受講した研修形態（集合／オンライン／オンデマンド）に対する満足度はどうですか？　4段階（最高4）で回答してください。」

※ Googleフォーム「事後アンケート」より（任意回答）

調査期間：R5.4.14～R6.1.23
調査対象：基本研修＆専門研修の受講者（のべ3,793人）

	4（とても満足）	3	2	1
全体【N=3,793】	2,679（70.6%）	1,040（27.4%）	67（1.8%）	7（0.2%）
集合型【N=1,893】	1,513（79.9%）	359（19.0%）	19（1.0%）	2（0.1%）
オンライン型【N=1,709】	1,025（60.0%）	635（37.1%）	44（2.6%）	5（0.3%）
オンデマンド型【N=43】	27（62.8%）	14（32.6%）	2（4.7%）	0（0%）

「集合型」の満足度は「オンライン」、「オンデマンド」よりも高い

「オンライン」に関する感想等（自由記述欄）

◎好意的なもの

チャット機能は質問しやすい、移動時間が無くて済む、時間が有効に使える

△否定的なもの

途切れる、聞こえづらい、疲れやすい、交流が難しい、慣れていない

「オンデマンド」に関する感想等（自由記述欄）

◎好意的なもの

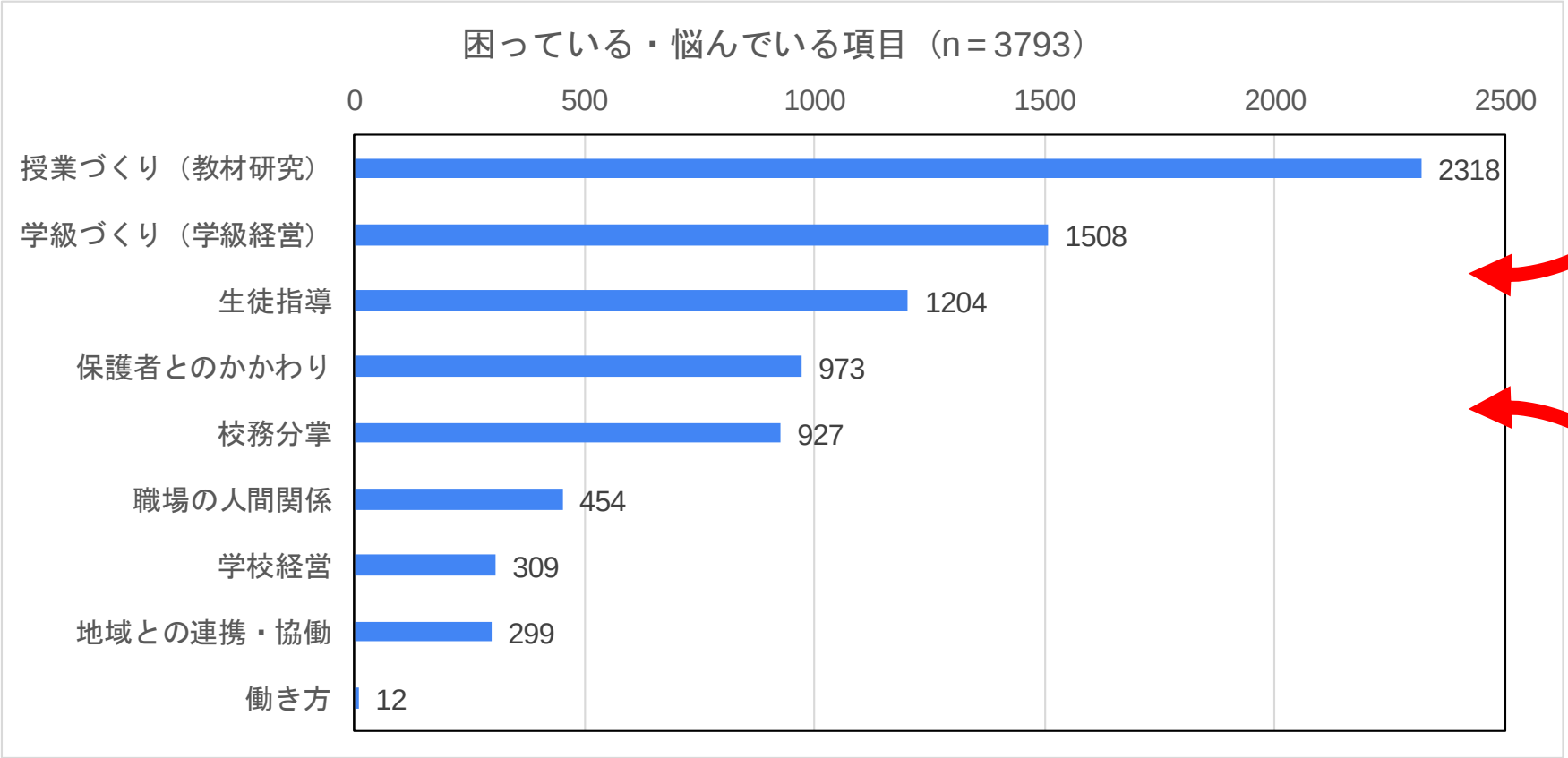
空き時間に自由に視聴できる、止めたり巻き戻したりできる、視聴可能期間が長い

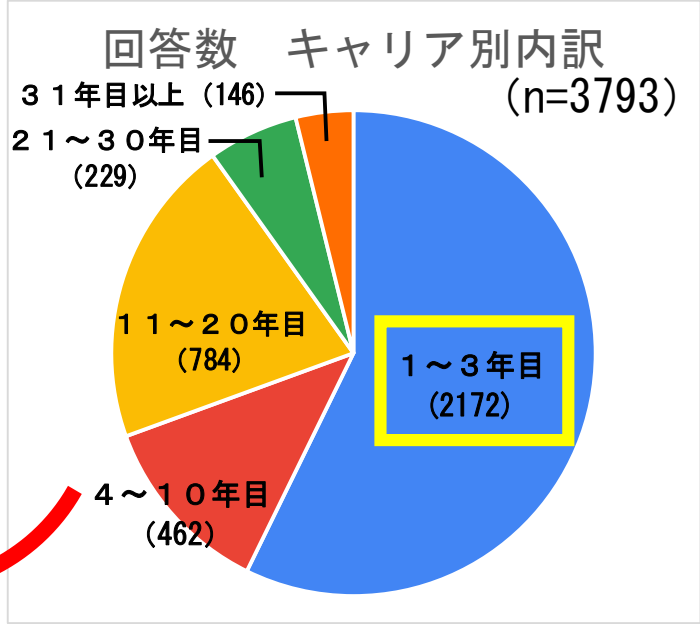
△否定的なもの

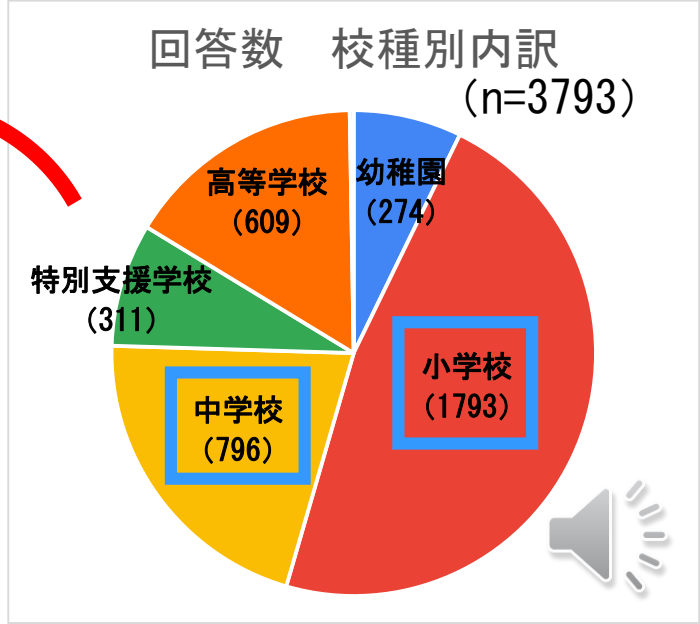
講師に質問できない、勤務時間内に設定するのが難しい、意見交換がしたい

（４）教職員が困っている・悩んでいる項目の調査

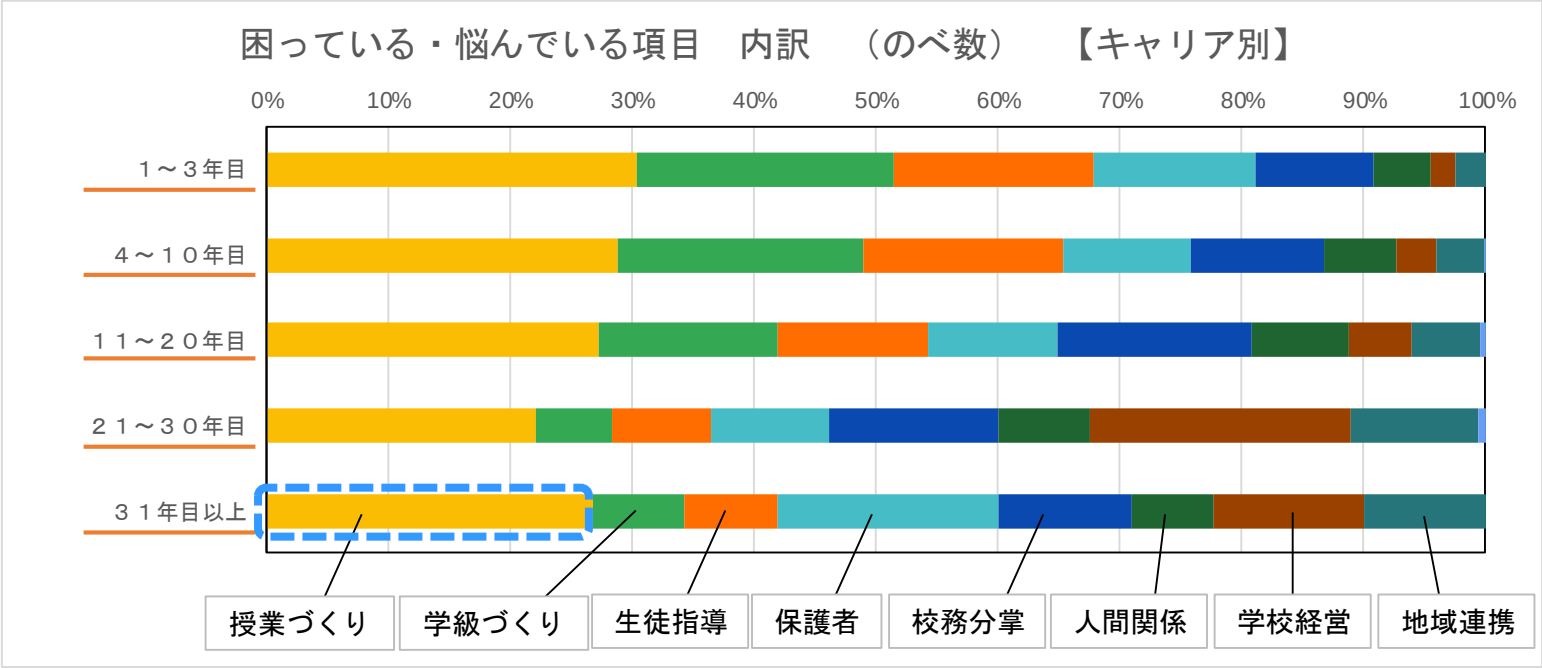
「現在、仕事を進める上で、
特に困っている項目・悩んでいる項目を教えてください。」
※ Googleフォーム「事後アンケート」より（任意回答・のべ人数）

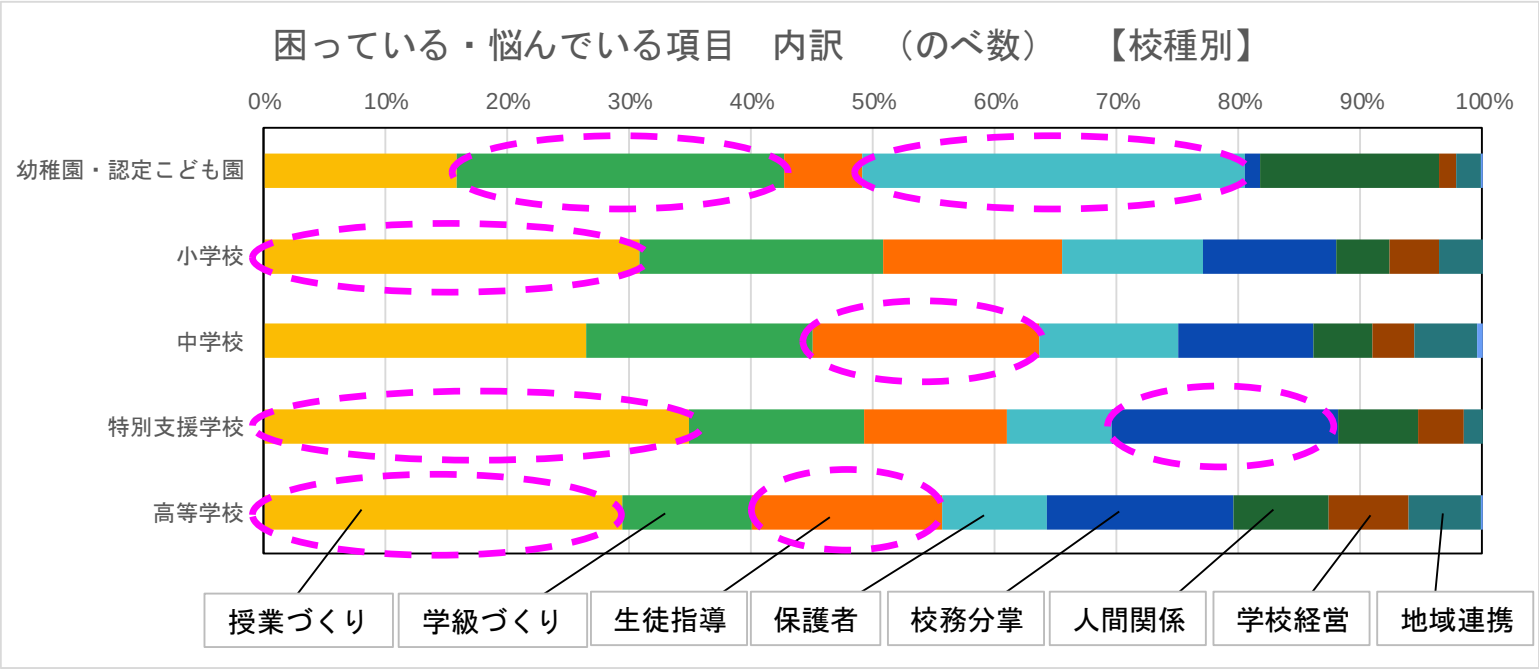






※キャリアが「１～３年目」、校種が「小学校・中学校」の回答数が多いため、
その回答が大きく反映している。





「授業づくり」
「学級づくり」
「生徒指導」

キャリアを重ねると減少（30年目まで）

「保護者とのかかわり」
→変化なし

「校務分掌」
「学校経営」
「地域連携」

キャリアを重ねると増加

校種ごとに「困っている・悩んでいる項目」が異なる

「困っている・悩んでいる項目」具体的記述から

項目	主な記述
授業づくり	教材研究の不足、ICTの活用方法、教育課程の評価、学習意欲を引き出す授業、 学力差をどのように埋めるか、児童生徒が主体的に学ぶ授業づくり　等
学級づくり	特別支援の手立て、落ち着いたクラスづくり、孤立傾向にある児童生徒、 不登校への対応　等
生徒指導	価値観の多様化、児童生徒との距離感、授業中の児童生徒の行動　等
保護者とのかかわり	保護者との信頼関係づくり、家庭への支援方法、臨機応変の対応　等
校務分掌	多大な業務量、部活動指導、仕事の効率化、新しい仕事や担当　等
職場の人間関係	連携不足、職員間の関係性、雰囲気　等
学校経営	教員不足、校内での組織づくり、若手教員の育成、働き方改革　等
地域連携	コロナ後の地域との連携、部活動と地域との関わり、コミュニティスクールの運営、 地域のコーディネーターの活用、地域との関わりが少ない　等

３．次年度以降の展望

質の高い研修体系をつくるために・・・

〇効果的な「リフレクション（省察）」の方法を検討
　・リフレクション（省察）を含めた研修の運営

〇研修効果を高める「横断・縦断・連携」の模索
　・中高一貫校への視察
　・外部機関と連携した研修の在り方を検討

〇「事後アンケート」項目の見直し
　・“困っていること”から“学びたいこと”へ
　・今年度の分析結果との比較
　・アンケート結果の研修講座への反映

「令和の日本型学校教育」を実現するために
求められる“新たな教師の学びの姿”とは？